

【報告ノート】 KUIS の正課外活動における SDGs の取り組み

—学生団体 55!MAKUHARI の成り立ちと活動について—

玉 造 美 恵*、角 田 愛 子**、
長 尾 明 子**、遠 藤 誠**

Actions for SDGs in Students' Extracurricular Activities: The Establishment and Activities of 55!MAKUHARI and Other Initiatives

TAMATSUKURI Yoshie, TSUNODA Aiko,
NAGAO Akiko, ENDO Makoto

Abstract:

The Volunteer Center (hereafter VC) is celebrating its 10th anniversary this year. Over 5,000 students have participated in volunteer activities in the past decade. The VC also supports the student group 55!MAKUHARI (hereafter 55M) which engages in SDGs-related activities on campus, such as the collection of contact lens cases, plastic bottle caps and 55!OSAGARI (secondhand books from students to students). Funds raised are donated to JCV (Japan Committee, Vaccines for the World's Children) which provides children's vaccines worldwide. Off campus, 55M's THAT'S FASHION WEEKEND also ranked in among the top 10 universities in Japan at the BEST SDGs AWARD for University Students, a renowned SDGs contest in Japan. The VC continues to support other student activities as well as university activities such as the Food Bank to support student life initiated during COVID-19.

キーワード: SDGs、ボランティア、環境、社会貢献

* 神田外語大学 産官学・地域連携部 ゼネラルマネージャー

** 神田外語大学 ボランティアセンター 職員

1. はじめに

ボランティアセンターは今年で設立10周年を迎える。これまでボランティア活動に参加した学生数は5000人を超える。学生のボランティア活動を支える業務以外に、ボランティアセンターでは、SDGs・地域貢献をテーマに活動を行っている学生グループ55!MAKUHARIのサポートを行っている。彼らの活動は、大学の記録として残ることが少ないことから、その成り立ちと活動をメモとしてここに記録・報告したい。

本学の学生はさまざまなサークル・クラブ活動といった課外活動に取り組んでいる。その活動は、部>同好会>愛好会と人数によってさまざまな名称に分かれるが、学部・学科や学年を超えて同じ興味を持つ者が集い、仲間と共に目標を決め、それにチャレンジすることで、人間的な成長を育んでいる。

名称にSDGsを含むクラブ・サークルはないが、ボランティアセンター管轄のクラブ・サークルであるボランティアユニオンには、東日本大震災の被災者に寄り添い、長期休暇を利用して現地の児童館等で活動を行うMAKE SMILE(同好会)や、海外で安心して住める住居の建設を行う国際NGO団体Habitat for Humanityの日本における学生団体Habitat for Humanity KUIS(同好会)、大学近隣の小学校や図書館に赴き、幼児・児童への本の読み聞かせを行うHello Time(同好会)等があり、多くの学生が学業とアルバイトの忙しい時間を縫って活動を行っている。

55!MAKUHARIは、所属する人数が少ないことから、大学のクラブ・サークル(部・同好会・愛好会)には正式に承認されるに至っていないが、国連の持続可能な開発のための2030アジェンダを知り、自分たちが未来のために今できることはないかを考え、その最初の一歩としてペットボトルキャップやコンタクトレンズケースの回収や、教科書のリユース活動といった身近なことからSDGs活動を始めた学生グループである。

2. 55!MAKUHARIの成り立ち

55!MAKUHARIは、2019年にボランティアセンターが学生スタッフを募集したことに始まる。

【報告ノート】KUISの正課外活動におけるSDGsの取り組み

神田外語大学は1998年の長野オリンピック（冬季）を皮切りに学生ボランティアの派遣を始めた。2011年の東日本大震災をきっかけにボランティア活動を行う学生が増え始め、2013年にはボランティアセンターを設立。その後も、東北被災地への活動を続ける一方で、外国語大学という特性を生かして、2018年の平昌オリンピック（冬季）や2019年のラグビーワールドカップ等に多くの学生ボランティアを派遣してきた。特にオリンピックの東京招致が決まってからは、多くの学生が学んでいる語学を活かしてボランティア活動を行うことを希望しており、ボランティアセンターは、多くの学生にその機会を提供すべく、さまざまな企業・団体から依頼されるボランティアを紹介した。オリンピック東京2020大会の機運が高まる中、ボランティアセンターとしては、ボランティアのマッチングをするだけでなく、学生自らがボランティアを考えだし、それを実行する学生ボランティアを育成したいと考え、学生スタッフを広く募集した。集まった学生たちは、私たちの「今」を「未来の幕張」につなげよう！をモットーに、ネーミングを55!MAKUHARIとし、オリンピック・パラリンピックを盛り上げる活動を行うこととした。

しかしその活動を活発化しようとした矢先、新型コロナウイルスのパンデミックにより活動を休止せざるを得ない状況となった。オリンピック開催も延期となり、授業も課外活動もオンラインという状況に戸惑いながらも、2020年は、コロナ禍で入学式が出来なかった1年生を対象として行った10月の新入生歓迎会で、コンタクトレンズの空ケースとペットボトルキャップの回収に取り組み、12月にはボランティアセンターのスタッフと共に、パラアスリートを招いたオンラインセミナーを開催した。

2021年になってもコロナ禍で行動は制限され、キャンパスにも入構できない日々が続いた。そのような状況にあっても、学生たちはほぼ毎週オンラインミーティングを開いて、キャンパスに入構できなくてもできることはないかを話し合っていた。話し合いのツールには、当時未だ新しかったSlackを使用し、SNSを活用して自分たちの考えを発信した。

3. SDGsの取り組み

オンラインミーティングの話題は、受けている授業のこと、他大学の学生の活動、自分たちと同じ年ごろの起業家の活躍など、さまざまであったが、次第に2015年の国連総会で採択された持続可能な開発目標 (SDGs) の話題が増え、持続可能な開発のための2030アジェンダに示されている目標の2030年までに10年もないことに驚き、急速にSDGsへの関心を深めるとともに自分事として捉えるようになっていった。デザインに興味のある学生の一人がSDGsカラーのロゴを作成、別の学生はオンラインミーティングを議事録にまとめるなど、話し合った内容や気づいたことをSNSで発信するようになっていった。コロナ禍で自由に身動きができないオンライン漬けの状態が、彼らに将来についてじっくり考える機会を与えたともいえる。

オリンピック・パラリンピックに関する活動は、2021年5月に、オリンピック組織委員会参与で本学客員教授であった真田先生を招いてオリンピックの歴史や開催の意義についてのオンラインセミナーを開催して一旦区切りをつけた。オリンピック・パラリンピックの成功を学生の手で盛り上げようと言っていた彼らが、セミナーを通して、人権や平和、貧困や格差の問題について、深く考えるようになっていった。

図表1 55!MAKUHARIのロゴ



自分たちの今と未来のために、今すぐにもできることはないかと考えた彼らが行ったのが、コンタクトレンズの空ケースとペットボトルキャップのリサイクルである。2021年度の後期から授業がオンラインと対面の併用になり、キャンパスに入構できるようになったことも影響している。キャンパス入構が可能になると同時に、学内にコンタクトレンズの空ケースとペットボトルキャップの回収ボックスを設置した。

図表 2、3 回収ボックスの写真



コンタクトレンズの空ケースおよびペットボトルキャップのリサイクルについて、今までは漠然と知ってはいたものの、自分たちが回収の当事者となることで、改めてどのような仕組みで行われているのか、リサイクルした後はどのように役に立っているのか等を調べ、コンタクトレンズの空ケースは、再利用を推進するアイシティ eco プロジェクトに、ペットボトルキャップは認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会 (JCV) の活動に参加することとした。

アイシティ eco プロジェクトは、コンタクトレンズの空ケースをゴミとして焼却せずに、障害のある方々の協力を得てリサイクルする活動である。CO2 削減に貢献し且つその利益は日本アイバンク協会に寄付される。また、プロジェクトに参加する団体には、希望すれば回収ボックスが貸与される。2022年3月現在、小学校、中学校、高校、大学、専門学校を含めた1940校がこのプロジェクトに参加している。

ペットボトルキャップは、認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会 (JCV) の活動に参加している。回収業者によってリサイクル資源として売却され、その利益が JCV に寄付される。JCV はユニセフと連携してワクチンを発注し、支援国の子どもたちに届けられる仕組みである。

回収ボックスを学内のどこに設置するのが学生にとって便利なのかについても、何度も意見交換がなされた。メンバーが各自クラスメイトから聞

図表4 コンタクトレンズ空ケース回収



き取りを行い、コンタクトレンズの空ケース回収ボックスは、トイレの出入り口の前に設置することにした。これはトイレで鏡を見ながらコンタクトレンズを交換する学生が多いことが理由である。

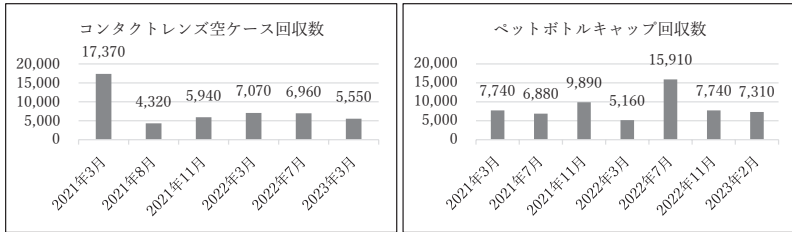
ペットボトルキャップの回収ボックスは、複数ある建物のうち、1号館と4号館の入口と学食の前に設置したが、回収状況を見回るうちに、4号館よりも8号館のニーズが高いことが分かり、現在は8号館内ゴミ箱付近、4号館学食内ゴミ箱の隣、アジア食堂食神内ゴミ箱隣に設置している。

回収ボックスの前には、オリジナルのポスターを作成して貼付している。

学内の回収ボックスは、コンタクトレンズの空ケース用が8カ所、ペットボトルキャップ用が3カ所あり、55!MAKUHARIのメンバーが担当を決めて定期的に回収ボックスを見回り、定期的に回収を行っている。回収されたコンタクトレンズの空ケースやペットボトルキャップは一時的にボランティアセンターの倉庫で保管し、それぞれの業者に送付あるいは回収に来てもらう仕組みとなっている。回収の活動は実施開始から2年に満たないが、現在まででコンタクトレンズの空ケースは47.21kg、ペットボトル

【報告ノート】KUISの正課外活動におけるSDGsの取り組み

図表5、6 回収数の推移（グラフ）



図表7 ペットボトルキャップ回収結果報告のポスター

55!MAKUHARI

ペットボトルキャップ 回収結果のご報告

重量：18.0 kg
個数：約7,740個

キャップをワクテンに投棄すると・・・

ポリオ*ワクテン：9.0人分
BCG*ワクテン：25.7人分

もしもキャップをゴミとして処理したら・・・

Co2発生量：56.7kg

たくさんのご協力ありがとうございます。

「コンタクトレンズの空ケースと一緒に「ペットボトルキャップ」の回収もSDGs貢献に向けて行っています。資源の減かいて協力により、上記の重量及びワクテン接種可能な人数分の回収をすることが出来ました！更に、キャップをゴミとして捨ててしまった場合のCo2発生量も上記の量を抑えることが出来ました！心から感謝申し上げます。今後も活動に励んでいきたいと思ひます。引き続きご協力の程宜しくお願い致します。

Twitter: @55makuhari

Instagram: @55makuhari

キャップは141kgを回収した。

コンタクトレンズの空ケースとペットボトルキャップの回収が軌道に乗ると、より身近な洋服や教科書をリユースしてはどうかとの企画が持ち上がった。OSAGARI 企画である。ファッションに興味はあっておしゃれもしたい。しかし洋服が手元に来るまでには、大量の水やCO2の排出があり、安く洋服が販売される陰では賃金を抑えられている人々がいるといった現

実社会の構造について、たくさんの意見が交わされた。企画のネーミングを決める際、一人の学生の「そういえば昔は兄弟や姉妹のお下がりってあったけれど、今は聞かなくなったね」という発言から、大学を家族に見立て、自分は使わなくなったけれど、必要な学生に使ってもらいたい品物をお下がりする、55 OSAGARI と名付けた。洋服からアイデアを得たものの、試着の問題や引き取った服の検品等、作業時間や物理的な問題があることがわかり、まずは教科書を中心に企画をスタートすることとした。米国の大学では、学内に使用済みの教科書を置けるスペースが設けられていて、希望する学生は無料で必要な教科書を持って行くのが当たり前のように行われていることを教職員から聞いたことも教科書に決めた一因である。

すぐに小さな本棚をボランティアセンターの前に設置し、Web デザインに興味のある学生がホームページを作成して、お下がりする品物の背景を紹介し、不用品の引き取り場にならないように、同じ品物を複数の学生が取り合うことにならないようにするための工夫をして、SNS や学内にポスターを掲示して発信を行ったが、学生たちの熱意に反して学内の反響は大きくなかった。他方、メンバーの学生が、面白そうとエントリーした THAT'S FASHION WEEKEND が主催する BEST SDGs AWARD for University Students では、その活動が評価され、決勝の 10 大学に選出された。学生たちは戸惑いながらも、コンタクトレンズの空ケースやペットボトルキャップの回収、そして OSAGARI 企画の 55!MAKUHARI の活動をプレゼンテーションで紹介した。

THAT'S FASHION WEEKEND が主催する BEST SDGs AWARD for University Students に出場したことで、学外で SDGs の活動を行う団体に認知されるようになった。2023 年 3 月には、神奈川県湘南地域を拠点に SDGs に関わる環境・社会問題に取り組む環境活動団体 NAMIMATI が主催する REGENERATION FESTA に招かれパネル展示を行い、参加者と交流した。

コロナ禍で始まった 55 OSAGARI の活動は、最初はあまり反響がなかったが、8 号館を中心に SALC や ELI 教員の協力を得て活動を続けるうちに、少しずつ学内の認知度が上がり始めた。教職員からの本や文房具の寄贈も

図表 8、9 OSAGARI 企画のイベント用ポスター



あり、利用者（寄贈する学生と受け取る学生）は確実に増えてきている。55!MAKUHARIのメンバーも、外国人教員や留学生にも目にとめてもらえるよう、貼付するポスターを英語で作成するなど、更なる工夫を凝らしている。少しずつではあるが活動の輪が学内外に広がり始めている。

4. 最後に

学生たちはSDGsという言葉やアイコンに興味があって活動を始めたのではない。気候変動や格差を感じ、食料問題や地球環境等、地球の未来を危惧したことがきっかけである。自分たちでもできるリサイクル活動やお下がり企画に取り組む中で、さまざまな企業や団体、個人の取り組みを知り、素晴らしいと思える活動が、別な側面ではマイナスに繋がってしまうことや、SDGsのアイコンを使っても、実際は商品のPR利用にしかならないケース等を目にして、政治、経済、環境、人権等、さまざまに絡み合う社会課題の複雑さも学ぶこととなった。

55!MAKUHARIの活動は地味で地道な活動である。学生の取り組みとっておらず、大学のどこかの部署が行っていると思っている人や、誰が回収しているか等は気にも留めていない人も多い。

それでも彼らが活動を続けるのは、日々行っていくことが大切であり、未来を良くするのはどこかの誰かではなく自分たちである、“If not me, if not now, when¹⁾”。と強く思っているからである。

最後に、学生の活動ではないが、SDGsに関わる活動ということで、大学が行っている食料支援について触れておきたい。

2021年9月、コロナ禍で経済的に困っている学生を支援したいと、フードバンクちばより、ちば産学官連携プラットフォームを通して米を中心とした食料支援の申し出があった。フードバンクちばでの食料の仕分は、ちば産学官連携プラットフォーム加盟校のボランティア学生が担当している。

大学内での配布はボランティアセンターが担当し、出来るだけ多くの学生に行きわたる様、受け取る個数を決めて配布している。

食料支援時は毎回長蛇の列ができる。毎回実施するアンケートから、そのほとんどが一人暮らしであることが分かった。食料支援に携わる職員の発案で、2022年の夏からは、大学に届いたお中元やお歳暮の一部や、教職員の自宅で余った食料や日用品を寄贈してもらっている。

その他大学では、敷地内の樹木の手入れで発生した落葉や雑草をゴミとして廃棄処分せずに、バイオネスト²⁾という方法で腐葉土化し有機肥料としての活用や、トイレ用には再生水を利用するといった取り組みも行っている。

SDGsの取り組みは目標に掲げた2030年で終わるものではない。一つひとつの活動は小さくても、一人ひとりが今できることに取り組むことで安心して暮らしていける未来を築いていくことを願ってやまない。

1) 女優エマ・ワトソンが2014年9月20日にUN WOMEN親善大使として国連で行ったスピーチの言葉。

2) バイオネスト: Bio = 生物。Nest = 鳥や昆虫の巣。枝や落ち葉などでつくる大きな堆肥樹のことで、庭園内に自然に溶け込み、景観的にも魅せる(映える)コンポストのこと。

【報告ノート】KUIS の正課外活動における SDGs の取り組み

参考文献

- 55!MAKUHARI <https://www.instagram.com/55!MAKUHARI/>
アイシテイ eco プロジェクト <https://www.eyecity.jp/eco/>
https://static.eyecity.jp/pc/pdf/eco/eco_pdf_2206.pdf (2023 年 8 月 17 日閲覧)
認定 NPO 法人世界の子どもにワクチンを日本委員会 (JCV)
<https://www.jcv-jp.org/> (2023 年 8 月 17 日閲覧)
THAT'S FASHION WEEKEND
<https://thatsfashionweekend.com/sdgsaward> (2023 年 8 月 18 日閲覧)
マイナビ学生の窓口 2023 年 4 月 20 日掲載
<https://gakumado.mynavi.jp/gmd/articles/61136> (2023 年 8 月 18 日閲覧)
環境活動団体 NAMIMATI
<https://www.shonan-namimati.com/> (2023 年 8 月 18 日閲覧)
"If not me, if not now, when".
https://www.unic.or.jp/texts_audiovisual/audio_visual/learn_videos/gender/
<https://www.heforshe.org/en> (2023 年 8 月 18 日閲覧)